

# 手賀沼の魚 1

※特定外来生物 外来生物法により生態系、人の生命、農林水産物への被害を及ぼすものに指定された種。指定されると飼育、栽培、保管、運搬、輸入、野外へ放つなどが禁止されます。違反すると個人の場合、最高で3年以下の懲役、300万円以下の罰金、法人の場合1億円の罰金が科せられる場合があります。  
 ※国際自然保護連合(IUCN)の外来侵入種ワースト100 世界的にみて特に自然環境に対し悪影響を及ぼしている侵略的外来生物100種類のリスト、魚類は8種類。

<p><b>コイ</b> (コイ科)</p>	<p>全長50cm～ 国内移入種 / 国外移入種 国際自然保護連合 (IUCN) の外来侵入種100</p>		<p>今見られる個体の多くは「ヤマト」といわれる体高が高い中国から移入したものが由来であるとされています。ヒゲは2対(4本)あります。昔は食用に供するため大切に扱われ、手賀沼でも稚魚を放流していました。平成15年、霞ヶ浦でコイヘルペスが大発生後、千葉県では移動が制限されています。</p>	<p><b>ゲンゴロウブナ</b> (コイ科)</p>	<p>全長30～40cm 国内移入種</p>		<p>ヘラブナとも呼ばれています。ブナ類では体高が最も高く、最も大きく成長します。琵琶湖水系原産です。主に植物プランクトンを食べます。手賀沼では、釣りの対象魚として人気があり、東日本大震災後も放流が行われています。</p>
<p><b>ニゴイ</b> (コイ科)</p>	<p>全長50cm</p>		<p>コイに似ているためこの名前がつけました。似鯉(にごい)といっても、コイとは背びれの形や顔つき、ヒゲの本数(1対2本)が違います。川を好むとされていますが、コイと同じく水の汚れに強く手賀沼での確認も珍しくありません。</p>	<p><b>ギンブナ</b> (コイ科)</p>	<p>全長25cm～</p>		<p>マブナとも呼ばれます。水の汚れに強く、コイと同様に手賀沼では数多く生息しています。釣りの対象魚として人気があります。ギンブナはほとんどがメスで、他の魚の精子の刺激で卵が孵(かえ)る珍しい魚です。東日本大震災後、手賀沼では放流が行われていません。</p>
<p><b>モツゴ</b> (コイ科)</p>	<p>全長8cm</p>		<p>D一般保護生物 口が小さくクチボソとも呼ばれています。手賀沼の小魚のなかでは、最も数が多いと思われ、雑魚(ざこ)の代表格です。コイの仲間としてはめずらしく、親が卵を守ります。釣り人には、エサ取りとして嫌われますが、つくだ煮用として重宝され放流をしていましたが、東日本大震災後は放流が行われていません。</p>	<p><b>タモロコ</b> (コイ科)</p>	<p>全長10cm 国内移入種</p>		<p>他の魚の放流に混ざって、手賀沼に移入されたと考えられます。モツゴに似たスマートな体形ですが、頭部が丸く、モツゴと違いヒゲが(1対2本)あり、ヒゲにより簡単に見分けられます。雑魚(ざこ)として、佃煮や甘露煮の材料とされていました。</p>

<p><b>タナゴの仲間たち</b></p>		<p><b>ハゼ科の魚たち</b></p>					
<p>タナゴが生息する水辺は、良好な水辺環境が残っている指標にされています。タナゴの仲間は、メスが産卵時に産卵管を伸ばして卵をイシガイ科の二枚貝の中に産みつける特殊な形態を持ちます。二枚貝は幼生(クロキジウム)が、ハゼ科のヨシノボリ類に寄生して育ちます。この三者の関係がないと、タナゴの仲間は生息できません。下記の三種は、今日手賀沼で見られるタナゴ類です。このほかゼニタナゴ、タナゴ、アカヒレ、タビラなどもかつて手賀沼にたくさんいましたが、近年見られなくなりました。</p>				<p>ハゼ科の魚は、口が大きく、背びれは2枚に分かれているなどの特徴があります。おなかには吸盤があります。利根川流域に多く生息する川ハゼの仲間は総称して「ゴリ」と呼ばれています。孵化(ふか)した仔魚が海に下り、その後川を上り淡水域で成長する「陸海型」と、淡水域だけで一生をおくる「陸封型」があります。現在の手賀沼にはヌマチチブとトウヨシノボリが多く、ウキゴリは少ないようです。下記のそれぞれの特徴が同属の種を比較するポイントになります。</p>			
<p><b>タイリクバラタナゴ</b> (コイ科)</p>	<p>体長6～8cm 重点対策外来生物</p>		<p>オカメタナゴとも呼ばれています。中国大陸原産で、戦時中ソウギョにまじり関東地方に移入され、その後全国に広がりました。オスの婚姻色は色鮮やかです。タイリクバラタナゴは、繁殖力が強く、在来のタナゴ類に大きな影響を与えています。</p>	<p><b>ヌマチチブ</b> (ハゼ科)</p>	<p>全長15cm</p>		<p>胸びれの付け根に橙(だいだい)色の模様、頬に水色の斑点があります。頭部が丸く6頭身とずんぐりしているのが特徴です。気が荒くなわばりを作るので、飼育する時は注意が必要です。</p>
<p><b>ヤリタナゴ</b> (コイ科)</p>	<p>全長10cm C 要保護生物</p>		<p>日本のタナゴの中で一番広い分布域を持つ魚です。一対(2本)のひげがあります。繁殖期は春から夏でオスの婚姻色は色鮮やかです。手賀沼ではほとんど見ることが出来ませんが、流域ではまだ見ることができます。</p>	<p><b>ウキゴリ</b> (ハゼ科)</p>	<p>全長13cm</p>		<p>前の背びれ(第一背びれ)の後ろ側に黒い点があります。若魚は水底から離れて中層でフワフワと泳ぐ習性から「ウキゴリ」の名がつけました。</p>
<p><b>オオタナゴ</b> (コイ科)</p>	<p>全長10～20cm 要注意外来生物</p>		<p>中国大陸原産です。霞ヶ浦などで帰化定着していることが確認され、最近では手賀沼でも見られるようになり問題になっています。体形はひらべったく、体高が高く、胸びれ近くに星形の模様があります。</p>	<p><b>トウヨシノボリ</b> (ハゼ科)</p>	<p>(クロダハゼ) 全長7cm</p>		<p>クロダハゼと呼ばれるようになりました。眼から口にかけて、赤いスジ模様があります。ヌマチチブとの見分けのポイントはヨシノボリは頭が小さく尖っていて8頭身あります。繁殖期オス同士が会おうと口を大きく開き、威嚇し合う姿が見れます。</p>

# 手賀沼の魚2

※特定外来生物 外来生物法により生態系、人の生命、農林水産物への被害を及ぼすものに指定された種。指定されると飼育、栽培、保管、運搬、輸入、野外へ放つなどが禁止されます。違反すると個人の場合、最高で3年以下の懲役、300万円以下、法人の場合、1億円の罰金が科せられる場合があります。  
 ※国際自然保護連合(IUCN)の外来侵入種ワースト100 世界的にみて特に自然環境に対し悪影響を及ぼしている侵略的外来生物100種類のリスト、魚類は8種類。

## エビの仲間たち

エビの仲間は、甲殻類と呼ばれていて、体は固い甲羅で覆われています。手賀沼では、昭和20年代まで水草類に付着するようなかたちでたくさんのヌカエビが生息していた。エビ漁が盛んだったが、水が汚れ、水草の消失で姿を消しました。手賀沼の水質が悪化した時期はテナガエビが多く、現在はスジエビが多く生息しています。

ヌカエビ



スジエビ (テナガエビ科) 長3~4cm



現在手賀沼で一番多く生息しているエビの仲間になります。手賀沼の水質が悪化していた時期には、少なかったようです。見分けるポイントは、額角上縁(眉間の角)には3~7本のとげがあり、胸部に逆ハの字の模様があります。

テナガエビ (テナガエビ科) 長~9cm



産卵期になると産卵場を岸辺に移動してきます。通常は水深の深い場所を暮らします。メスの見分けのポイントは、この長い足はさみ状で、体色は成体では暗褐色で、若体には10~14本の足があり、胸部にmの模様があります。

シナヌマエビ (ヌマエビ科)

体長2~3cm 国外移入種



釣り人のエサとして手賀沼に入ってきたエビで、平成23年頃から手賀沼周辺水路で見かけるようになり、現在水路では多く見られるようになりました。

アメリカザリガニ (ザリガニ科) 体長8~11cm 要注意外来生物

近年、手賀沼では少ないようですが、水田周辺の水路や河川には数多く生息していて、稲作や水草への悪影響が大変心配され、水域の生息環境破壊が指摘されています。メスが子を守るために繁殖力が大変強く繁殖期は通年です。



水生生物ですが、エラが濡れていれば、陸上を数キロ移動できます。オス、メスの見分けるポイントは、オスはメスよりハサミが大きく、腹部の付け根に逆さ向きの突起があります。

ツチフキ (コイ科)

全長10cm 国内移入種



琵琶湖からの移入種。アユの放流とともに東日本に広がったと考えられます。流れのあまりない水路、河川や、湖に生息します。

ワタカ (コイ科)

全長30cm 国内移入種



日本が大陸と陸続きだったころの生き証人といわれています。琵琶湖とその周辺にのみ生息していましたが、アユの放流とともに東日本に広がったと考えられます。本来の生息地である琵琶湖では個体数が激減していますが、利根川水域では逆に増えてきています。

ウナギ (ウナギ科)

全長80cm~

絶滅危惧種 (EN)



昭和20年代までは手賀沼に多く生息していて、漁の重要な対象でした。海で生まれた稚魚(シラスウナギ)は川をのぼって淡水域で成長し、産卵のため再び海に下ります。川(湖沼)と海を行き来するため堰(せき)などの構造物が、その生息に悪影響を与えます。生息数が激減しているため、平成26年、国の絶滅危惧種に指定されました。

タウナギ (タウナギ科)

全長20cm 国内移入種 / 国外移入種



もともとは熱帯から亜熱帯域にかけて分布する淡水魚です。在来種は今日、沖縄に生息する個体群のみと言われています。中国料理や韓国料理用に生きたまま輸入されたことから、これが広まった原因ではないかと言われています。

メダカ (メダカ科)

全長3cm前後

B 重要保護生物

手賀沼の魚の中(成魚と比較)では小型の魚です。沼につながる小川や水田にたくさん生息していますが、水田環境の変化などのために、昭和20年代後半から次第に減少しています。近年メダカは、キタノメダカ、ミナミメダカの2種類に分類され、手賀沼にいるのは、ミナミメダカになります。



メダカのオスは、背ビレに切れ込みがあり、尻ビレが長いのが、メスの判別ポイントになります。カダヤシの尾ビレが丸く扇(うちわ)のような形に対し、メダカは尾ビレ後縁が浅く切れ込むのが特徴です。

カダヤシ (カダヤシ科)

全長3~5cm

国際自然保護連合(IUCN)の外来侵入種ワースト100

特定外来生物

蚊の幼虫であるボウフラを捕食する目的で戦前導入され、昭和40年代以降急速に分布を広げました。近年カダヤシに駆逐されメダカの減少が心配されています。メダカより水質悪化に強く、カダヤシがメダカの稚魚を捕食するなど攻撃性が強いといわれています。繁殖形態は卵胎生で、これもメダカより水質悪化に強い一因になります。尾ビレの後縁が丸く尻ビレがちょこんとついている印象が特徴になります。



ドジョウ (ドジョウ科)

全長11~12cm

ヒゲは5対(10本)あります。エラ呼吸だけでなく腸で空気呼吸もできるので、水中の低酸素に強い魚です。小川や水路では今も見られますが、水田などの浅い水域で産卵するので、干拓後、沼の中の浅い水域が減少したこと、水田環境の変化など、手賀沼で減少したおもな理由として考えられます。



オオクチバス (サンフィッシュ科)

全長30~50cm

国際自然保護連合(IUCN)の外来侵入種ワースト100

特定外来生物



ブラックバスとも呼ばれています。魚類や甲殻(こうかく)類を主な餌にします。大正時代に北アメリカから持ち込まれ全国各地に広がりましたが、手賀沼に姿を見せ始めたのは昭和40年代後半からです。現在、生息数は多くありませんが、増加しないように注意が必要です。

カムルチー (タイワンドジョウ科)

長30~80cm

要注意外来生物

大型の肉食魚で他の魚やカエルも食べます。魚ですがエラ呼吸のほか空気呼吸もします。昭和30年代には数多く生息していたようですが、近年は減少しています。かまれた際に「雷に打たれた」ように痛いことから「ライギョ」とも呼ばれます。



ブルーギル (サンシュシュ科)

全長25cm

特定外来生物

手賀沼に姿を見せ始めたのは昭和50年代後半です。えら蓋(ぶた)の後方に青い斑(はん)がありこれが名前の由来です。甲殻類や魚類を食べるオオクチバスと違い、小動物のほか水生植物も食べる雑食性に加え、水生生物の卵を好んで食べることから、「エッグイーター」の異名で呼ばれています。各地で在来生物への被害が報告されています。繁殖期は5月後半から9月までと長く、コロニー(群れ)を作り産卵します。



ハクレン (コイ科)

全長50cm~

国外移入種



コクレンと共にレンギョともよばれています。中国原産の魚で食用として日本に移植されました。水の汚れに強くアオコ(植物プランクトン)も食べると言われています。夏(繁殖時期)の利根川で大きくジャンプする映像がメディアで紹介されることがありますが、手賀沼でも見るすることができます。

コウライギギ (ギギ科)

全長20cm

国外移入種



中国、韓国から食用として生きたまま輸入されたものが、平成23年頃から霞ヶ浦を中心に広がったと考えられています。平成27年に手賀沼でも初確認されました。チャネルキャットフィッシュと同様、生態系への影響が心配されています。

チャネルキャットフィッシュ (ナマズ科)

特定外来生物

アメリカナマズとも呼ばれています。昭和56年、食用として霞ヶ浦に導入されたものが、網から逃げ出し定着したといわれています。その後利根川水域を中心に分布を拡大し、手賀沼でも個体数が増えてきています。食欲旺盛で何でも食べるため、生態系への悪影響が心配されています。

